

「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

第6回

「研究生活のはじまり」

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

2010年、関西大学人権研究室に呼ばれて、大学教員のみなさん相手に「お座敷」をしました。その後、みなさんと呑みに行く道すがら、Kさんという方から「いつきさん、研究に興味はないの？」と質問されました。わたしは勉強が大嫌いです。そんなわたしが研究に興味なんてあるわけないと思ったのですが、口をついて出てきたのは「あります」という言葉でした。それに対して、Kさんは「ふうん。じゃあ学位と単著だね」と返されました。

今考えても、なぜあの時「あります」と答えたのか不思議でしかたがありません。ただ、心当たりがないわけではありません。わたしはこれまでたくさんの人からインタビューされてきました。テレビや新聞、あるいは行政の啓発パンフレットのインタビューもありました。さらに、卒業論文などでトランスジェンダーをテーマにする大学生のインタビューに答えたこともありました。インタビューする人がどんな人であっても、出された質問に対して真剣に考え、正直に答えてきました。ところが、いつの頃からか、「なぜインタビューをうけなきゃならないのか」と考えるようになってきました。インタビューをする人は、それを論文にまとめ、例えば卒業論文を完成させたり、自分の業績にしたりというかたちで、なんらかの「利益」を得ます。しかし、そのインタビューの「中身」を生きてきたわたしには、なんの「利益」もありません。それどころか、論文の中ではわたしは匿名のAさんでしかありません。わたしを匿名化することで、わたしの人生を「わたし」から切り離し、しかもそれを自分の「利益」とするのは、搾取以外の何ものでもないと思いました。であるならば、わたしがわたし自身を研究テーマにしようと思ったのです。

「学位と単著」であるなら、まずは学位をとらなければなりません。わたしは工学部出身です。4回生の時に、自分には理系は無理と思いながらも、モラトリアム気分で大学院を受けてみました。でも、学力的にとうてい及ばず、そのまま教員になりました。したが

って、学位は工学士です。一方、Kさんが言われた学位は「博士」です。とりあえず、教員の現職経験があり、それなりにいろいろと文章を書いているので、いきなり博士課程に入れなないと知りあいの大学教員に相談をしましたが、もちろん無理でした。今まで自分が書いてきたさまざまな文章は、研究の世界では一文の価値もないということを思い知らされました。ならば、現職教員であることや、その中で実践を積み重ねてきたというつまらないプライドは捨てて、「なにものもない人間」からスタートしようと思いました。

まずは修士をとらなければなりません。ところが、修士課程を修了するためには、大学院の授業に出なければなりません。昼間の授業に出るためには、休職する以外ありません。どうしようかと途方に暮れた時、ふと京都教育大学の募集要項を調べてみました。すると、現職教員が学べるように、修士課程の授業はすべて18時以降に設定されていることがわかりました。さいわい、京都教育大学には部落問題が専門の教授がおられて、かつていろいろとお世話になった方でした。その先生に相談してみると、「受けてみたら」と言われました。そして、2011年に受験し無事合格、2012年4月、晴れて京都教育大学大学院教育学研究科の大学院生になりました。

18時の講義開始時間に間にあうためには、退勤時間の17時に出なければなりません。それまでそんな時間に職場を出たことがありませんでした。申し訳ない気持ちいっぱい、同僚に「ごめん、大学の講義があるんで帰ります」と言うと、みなさん「自分も大学に行けるなら行きたい。自分の分もがんばってきて」と励ましてくれました。大学院に入ってわかったことは、自分がほんとうに「小さいところ」にいたということでした。そんな自分が新しい世界に触れ、少しずつ変わっていく。学ぶということがこれほど楽しいことかと思いました。とにかく、先生が話すひとつひとつの言葉を聞き漏らすまいと、必死で聞き、ノートをとる毎日ははじまりました。